

古事記から学ぶ その14
崇神(すじん)天皇の活躍とその後

本文だけで425頁の「現代語訳 古事記」は、200頁まで読み進んだ。

初代の神武天皇から、第11代の垂仁天皇までの系図が文章で示されたが、読みながら理解していくのはかなり重労働だった。少しでも理解が深まるようにと思って、文章で示されたものを「系図」として整理して見たが、けっこう厄介な作業になった。

並行して、登場人物を「古事記登場人物辞典」としてまとめて見たら、ここまでで468人になった。

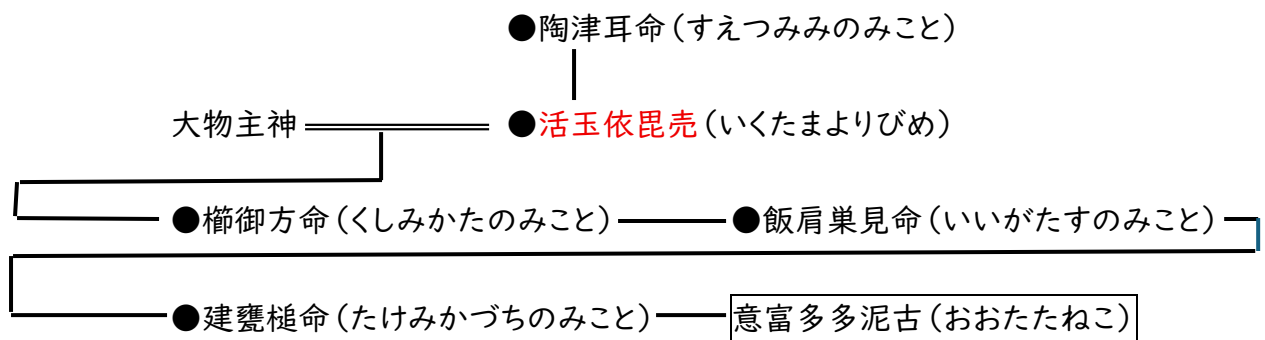
次の章は、第10代の崇神(すじん)天皇の時代の出来事から始まる。

<1> 崇神(すじん)天皇と三輪の神

崇神天皇の御世には、伝染病が流行して多くの人が命を落とした。嘆き悲しんだ天皇は、神殿を造って祈願をした。ある日、神殿の床で眠っていると夢の中に●大物主神が現れてこう告げた。

「今はやっている病は私の仕業だ。私を祭れば神の祟りは治まるはずだ。●意富多多泥古(おおたたねこ)に命じて、私を祭らせよ」

夢から覚めた天皇は、四方に早馬を走らせて意富多多泥古という者を探すように命じた。その結果、河内の美努(みの)の村で見つけて、天皇の前に連れてきた。素性を尋ねられた意富多多泥古は、大物主神を祖先とする自らの系図を明らかにした。



崇神天皇は、意富多多泥古を神主として御諸山(みもろやま)に、●意富美和之大神(おおみわのおおかみ)すなわち美和の大物主大神を祀った。また●伊迦賀色許男命(いかがしこをのみこと)に命じて、祭祀に使う80の平たい器を作らせて、天神・國神の社も作って祀った。また宇陀の●墨坂神(すみさかのかみ)に赤い色の楯・矛を供え、●大坂神(おおさかのかみ)に、黒い色の楯・矛を供え、坂の上や河の瀬にいるありとあらゆる神に幣束を供えて祀った。

これにより災厄は治まり、再び穏やかさを取り戻した。

この意富多多泥古が神の御子であると分かったのは、こんな経緯からだった。

容姿端麗な活玉依毘売は、ある夜これまたこの世の者とは思えぬような美しい男に出逢って、二人は恋に落ちた。二人が出逢いを続けているうちに活玉依毘売は身ごもった。両親は、相手が誰かと娘に問いたが、わからないと言う。両親の教えにより、寝床の周りに赤土をまき散らしたうえで、糸巻に巻いた麻系の先端に針を付けて、訪ねてきた男の着衣に刺しておくことになった。

翌朝になって確かめてみると、麻系は入り口の扉の鍵穴を抜けて外に出ており、部屋には三勾(糸巻に三巻き)だけ残っていた。糸の行く先を追跡して見ると、美和山の神社の前で終わっていた。

活玉依毘売を訪ねてきた美男は神（大物主神）であることがわかった。その結果として、この次第を語った意富多多泥古は、神の御子であるということがわかった。

姫の元に、三勾（みわ）の糸が残ったことから、この地を美和（三輪）と呼ぶようになった。

また、意富多多泥古命（おおたねこのみこと）は、神（みわ）の君、鴨の君の祖先である。

<2> 崇神天皇による平定

崇神天皇の御世には、朝廷の威風の届かぬ遠隔地に將軍を送り込んで制圧することが進められた。大毘古命（おおびこのみこと）を北陸道の高志（こし）へ、その子である建沼河別命（たけぬなかわわけのみこと）を東海道と東山道の十二国に派遣した。日子坐王（ひこますのみこ）を丹波國（たにわのくに）に派遣して●玖賀耳之御笠（くがみみのみかさ）を殺すことを命じた。

大吉備津日子命（おおきびつひこのみこと）は、西街道に向かい吉備國を平定した。

大毘古命が北陸道の高志（こし）へ向かう途中で、山城の幣羅坂（へらざか）まで来ると一人の少女が立っていて、歌を歌っているのが目にとまった。歌詞の要旨はこんな内容だった。

「日嗣ぎの御子の御真木入日子はおかしな人だ わが身に迫る危機に気がついていない……」

気になって後を追いかけて訊ねてみたが、知らぬ存ぜぬの一点張り、そのうちに視界から消え去った。

大毘古命は気になって、天皇に事の次第を報告した。

天皇は、「山城の國にいる建波邇夜須毘古命が反逆を企てていることを暗示してくれたに違いない」と言って、伯父である大毘古命に肅清を託した。

ここで登場人物の説明が必要になる。

*御真木入日子印恵命=崇神天皇のこと。開化天皇の子である

*大毘古命=孝元天皇の子で、開化天皇の長兄（つまり崇神天皇の伯父である）

*建波邇夜須毘古命=孝元天皇には、三人の妻がいて、開化天皇から見れば異母弟

大毘古命を主体として、丸邇（わに）の臣の子孫である●日子國夫玖命（ひこくにぶくのみこと）を副将として、丸邇坂（わにざか）に忌瓮（いわいべ：御神酒を入れる素焼きの器）を添えて戦勝祈願をして出発した。山城の和訶羅河（わからがわ）の岸边まで来ると、敵の建波邇夜須毘古命の軍は既に対岸に構えていた。

*山城の幣羅坂（へらざか）=現在の京都府木津川市幣羅坂。幣羅坂神社がある。

*丸邇（わに）=現在の地図で確認すると、天理市和邇。天理市の北端になる。

*和訶羅河（わからがわ）=現在の木津川と言われており、河の呼称から想像すると、支流が合流する地点と考えられる。

両軍とも、敵を誘い出して戦おうと言う戦術をとったことから、この地の名を「伊杼美（いどみ）」と言ったが、今は伊豆美（いずみ）と言っている。（古事記原文の記述）

副将である日子國夫玖命が大声で、火ぶたを切る発声をした。

「まずはそちらから、神に祈った上で最初の矢を放ってみろ」これに呼応して、建波邇夜須毘古命が矢を放ったが、命中しなかった。次に日子國夫玖命が放った矢は、見事に建波邇夜須毘古命に命中し落命した。配下の兵たちは、この光景を見てうろたえ、逃げ出してしまった。

逃げる兵を追いかけて久須婆（くすば：のちの葛葉）の渡しまで追い詰めたところ、敵兵は苦しきのあまり屎（くそ）を垂れてしまい、その屎が禪（はかま）にかかった。このことから、この土地を「屎禪（くそばかま）」と言ったが、今では久須婆と言っている。

*久須婆の渡し=現在の地図で確認すると、枚方市樟葉（くずは）。淀川の東岸に位置してい

る。地名・駅名として、樟葉(くずは)・楠葉(くずは)などがあり、統一されていない
敗走する兵を遮って切り倒すと、まるで鵜のように川面に浮かんだので、この川を鵜河と言った。
また、逃げる兵を切り屠(ほう)ったので、この地を波布理曾能(ほうりその)と言った。
現在の祝園(ほうその)で、淀川と木津川の合流点付近と言われている久須婆から木津川を20Km
以上遡ったところになる。

そもそも高志國(こしのくに)へ向かう旅の途中だった大毘古命は、都へ戻り天皇に報告をし、改めて
高志國を目指した。東の國に向かった息子の建沼河別命(たけぬなかわわけのみこと)と相津(あい
づ:会津)で出会った。このことから「相津(あいづ)」の地名が生まれた。
親子はそれぞれの地で、それぞれの任務を果たして都に戻った。國は平和が戻り、民は栄えた。
男は弓矢で獲った鳥獸を収める「弓端之調(ゆはずのみつぎ)」を、女は手先で作った織物を収める
「手末之調(たなすえのみつぎ)」を、それぞれ貢物として徴収することに定めた。(徴税の始まり?)
この天皇の御代を称えて「所知初國之御眞木天皇(はつくにしらししみまきのすめらみこと)」と言う。
この御代には、「依網(よさみ)の池」を造り、「軽の酒折の池」を造った。(農業用水の整備)
「依網(よさみ)の池」は河内國丹北郡池内村(今の大阪市住吉区)にあったが、現在は阪南高校の
グラウンドになり、大依羅(おおよさみ)神社が残っている。
「軽の酒折の池」の場所は、今の橿原市大軽町とする説と、河内の狭山とする説があるらしい。
この天皇(崇神天皇)は168歳まで生きたと記されているが、事実関係はわからない。陵は山辺道の
勾(まがり)の岡の上にある。全長242mの大きな前方後円墳で、JR桜井線の柳本駅の東側にある。

<3> 垂仁天皇

崇神天皇と御真津比売命の間に生まれた6人の御子の内、第一子である伊玖米入日子伊沙知命
(いくめいりひこいさちのみこと)は師木に玉垣の宮を造って、垂仁(すいにん)天皇と名乗り、國を治
めた。十一代の天皇である。

この天皇が●抄本毘古命(さほびこのみこと)の妹である●佐波遲比売命(さわぢひめのみこと)を
妻として、●品牟都和氣命(ほむつわけのみこと)を生み、丹波(たにわ)の●比古多多須美知能宇斯
王(ひこたすみちのうしのみこ)の娘である●氷羽州比売命(ひばすひめのみこと)を妻として●印
色之入日子命(いにしきのいりひこのみこと)・●大帯日子淤斯呂和氣命(おおたらしひこおしろわけ
のみこと)・●大中津日子命(おおなかつひこのみこと)・●倭比売命(やまとひめのみこと)・●若木
入日子命(わかきいりひこのみこと)の計五柱の御子を生んだ。

氷羽州比売命の妹である●沼羽田之入毘売命(ぬばたのいりびめのみこと)を妻として、●沼帯別命
(ぬたらしわけのみこと)と●伊賀帯日子命(いがたらしひこのみこと)の二柱を生んだ。

さらに、沼羽田之入毘売命の妹である●阿邪美能伊理毘売命(あざみのいりびめのみこと)を妻とし
て、●伊許婆夜和氣命(いこばやわけのみこと)と●阿邪美都比売命(あざみつひめのみこと)の二柱
を生んだ。

また、●大筒木垂根王(おおつつきたりねのみこ)の娘である●迦具夜比売命(かぐやひめのみこと)
を妻として、●袁邪弁王(をざべのみこと)を生み、山城の●大國之淵(おおくにのふち)の娘である●
荊羽田刀弁(かりばたとべ)を妻として●落別王(おちわけのみこ)を生み、●五十日帯日子王(いか
たらしひこのみこ)と●伊登志別王(いとしわけのみこ)を生んだ。

さらに、同じ大國之淵の娘である●弟荊羽田刀弁(おとかりばたとべ)を妻として●石衝別王(いわつ
くわけのみこと)・●石衝毘売命(いわつくびめのみこと)を生んだ。石衝毘売命は別名●布多遲能伊

理毘売命(ふたぢのいりびめのみこと)と言った。この天皇の御子は、総計16柱いた。

16柱の御子の内、大帯日子淤斯呂和氣命(おおたらしひこおしろわけのみこと)が、のちに第12代の景行天皇となって天下を治めた。この命は、身長一丈二寸、脛の長さが四尺一寸あったと古事記に記されている。(私見であるが、事実だと思ふことはできない数値である)

主な御子たちのプロフィールが示されているので、まとめてみた。

- 印色之入日子命 *血沼(ちぬ)の池・狭山の池を造り、日下に高津の池を造った
 - *鳥取の河上(現在の阪南市)に宮殿を建てて住んだ
 - *千振りの剣を造らせて石上の神宮に納めた
 - *剣を造ることに協力した部民を「河上部」とした
- 大中津日子命 *山辺の別(わけ)・三枝の別・稲木の別・阿太の別・尾張の三野(みの)の別・吉備の石无(いわなし)の別・許呂母(ころも)の別・高巢鹿(たかすか)の別・飛鳥の君・牟礼の別などの祖先
- 倭比売命 *伊勢の大神宮に仕えた
- 伊許婆夜和氣命 *沙本(のちの佐保)の穴太部の別の祖先
- 阿邪美都比売命 *稻瀬毘古王(いなせびこのみこ)の妻となった
- 落別王 *小月の山の君・三川の衣の君の祖先
- 五十日帯日子王 *春日の山の君・高志(こし)の池の君・春日部の君の祖先
- 伊登志別王 *子がなかったので、その名を後世に残すため子代(みこしろ)として伊登志部を制定した
- 石衝別王 *羽咋の君・三尾の君の祖先
- 布多遲能伊理毘売命 *のちに倭建命の後になった

以上

垂仁(すいにん)天皇を中心とする系図

